

メキシコ市における都市下層の子ども期と ストリートチルドレン —都市下層の生活史から—

小松仁美^{*}

本研究では、参与観察調査に基づき、3世代およそ40年におよぶメキシコ市の都市下層の一家族の生活史を描く。生活史を分厚い記述を用い、子どもがストリートチルドレンになるプロセスを考察する。

分析に際して、1960年代から現在に至るまでの経済変動・社会文化状況について概説し、ストリートチルドレンの3類型を用いて生活史に現れる家族成員の子ども期を分類する。

結果、各家族成員は、その子ども期をそれぞれがストリートチルドレンとして過ごしたが、そのストリートチルドレンとしての生活状況は時代の経済状況や家族形態によって異なった。具体的には、80～90年代の経済危機下で脆弱性の高い核家族からは行路死亡に至るストリートチルドレンが生み出された。経済の回復に加えて近住拡大家族となり脆弱性が弱まった近年の家族からは路上で一時的に働く子どもはいるもののその就学と家庭生活は続いている。

キーワード：都市下層、家族の生活史、脆弱性、ストリートチルドレン、メキシコ

1. はじめに

ストリートチルドレンは、後発の工業化過程を背景に、都市への人口集中過程におけるインフォーマル経済部門がフォーマル経済部門に吸収されずに拡大したことにより、1940年後頃のラテンアメリカ中所得国において、治安・交通・衛生の悪化などの都市問題を生じさせた路上で労働・生活などする大量の子どもを指す言葉として用いられはじめた (Agnelli 1986, Moulin = Pereira 2000)。社会問題化当初は一部住民や都市の為政者などによりときに暴力を伴って排除され、次第に市民や民間支援団体によりその暴力や彼らを取り巻く劣悪な状況への批判が高まっ

^{*} 淑徳大学大学院総合福祉研究科社会福祉学専攻博士後期課程単位取得満期退学、淑徳大学大学院総合福祉研究科調査・研究助手

た。現在では国際NGOをはじめ、ユニセフやILOなどの国際機関が取り組む一国際問題である。

メキシコ合衆国の首都メキシコ市（人口892万人弱¹⁾）には、ストリートチルドレンがおおよそ1万人前後いるとされ（COESNICA 1992, UNICEF 1996）、1990年代から民間団体を中心に様々な支援活動が行われてきた。

ところで、ユニセフは主にストリートチルドレンを次のように定義している。18歳未満を子どもとして、“children on the street（家族と何らかの結び付きがあるもの）”と“children of the street（まるで一人ぼっちのもの）”の2類型²⁾を用いている（Agnelli 1986=日本ユニセフ協会 1988: 30-31。以下、“on the street”と“of the street”と省略）。“on the street”と“of the street”は、ストリートチルドレンを厳密に区分するものではなく、その境界は曖昧な領域を含む。個々の子どもの路上における状況やその家族との関係は、社会状況および個別的な状況によって常に変化し続けるからである。特に、子どもは、社会状況はもとより家族関係をコントロールし難いであろう。さらに、都市下層は、社会状況、家族状況において不安定要素が多くあるといえるだろう。この2類型にストリートチルドレンになるリスクの高い“home based”を加えた3類型³⁾を用いて考察する必要がある。

本稿では、メキシコ市に暮らす都市下層の1つ家族の40年にわたる生活史をみることにより、子どもがストリートチルドレンとなるプロセスを解き明かすことをめざす。この家族の各成員は、子ども期を3類型の複数のカテゴリーを行き来しながら成人となる。一家の子ども世代は、子ども期の路上における様々な経験から成人後に3人中2人が死亡に至った。一方で、40年間に社会経済状況が変化するとともに核家族から血縁・地縁による相互扶助関係にある複数の家族が結びついた近住拡大家族へと家族の形態・機能の変化がみられ、一家の孫世代は、子ども期をストリートチルドレンとして過ごしながらも、子ども世代とは異なる生活を送っている。

そこで、ストリートチルドレン問題の背景および一家がおかれた社会的背景として主に1960年代以降の社会経済状況を概説し、生活史を記述し、ストリートチルドレンが生み出される要因を探りたい。特に、家族関係の変化は、都市下層の子どもが路上に排出され、より深刻な状況のストリートチルドレンとなることに大きく寄与すると考えられることから、介入支援プログラムへの示唆を提示したい。

2. 事例の位置付けと調査概要

2-1. メキシコ市におけるストリートチルドレン問題の社会背景

メキシコにおいては小売業の半数をストリートベンダーが占める⁴⁾（Euromonitor 2006。以下、ベンダーと省略）。ベンダーは、都市への人口集中過程においてフォーマル経済部門に吸収されなかった都市下層の人びとの主要な収入を得るための手段であり、同時に、食品や生活必需品を

入手する手段である。彼らは、不安定な労働と収入を背景に主に市中心部のインナーシティエリアおよび郊外のスラムに居住する。

メキシコ市のストリートチルドレンは、都市下層から生み出されている（COESNICA 1992, UNICEF 1996, Otero 1999）。地縁・血縁による相互扶助関係という近住拡大家族（Otero 1999, 増山 2004, 2005）を形成できていないことに関連して、ひとり親世帯のなかでも女性世帯主世帯から児童労働を契機に排出される（UNICEF 1996, Ferguson 2004, 2005）⁵⁾。特に、1980年代以降の経済危機下には、子どもを労働力として駆り出さざるを得なかった脆弱性の高い都市下層の孤立したひとり親世帯から生み出された（畑 2005：356-370）。

2-2. イサベル家の選定理由と調査概要

イサベル家については、これまでも記述し（小松 2008, 2010, 丸谷・小松 2008）、主な家族成員を図1に示した。調査は継続しており、新たな知見を含めて詳細は後述する。

イサベル家は、バンダー同士の結婚により形成された核家族である。結婚当初の一時期を除いて実質的なひとり親世帯であり、子どもの独立を機に子ども世帯およびバンダー仲間などとの相互扶助関係をもつ近住拡大家族を形成した。その成員は、子ども期からバンダーとして働く。子ども世代は1980年代の経済危機下において低年齢でバンダーとなり、3人中1人は幼少期から成人後も継続していた路上生活中に20代で死亡し、もう1人は幼少期からの薬物依存のために結婚後に30代で死亡した。社会経済および家族関係の変化の後、孫世代はバンダーとなったものの就学を継続している。イサベル家は典型的なストリートチルドレンを生み出す家族であるが、一方でストリートチルドレンとしての個々の成員のおかれた状況および成人後の生活には差異がみられる。このことから本研究の事例とした。

生活史は、イサベル家の成員およびマリアを含むストリートチルドレンへの参与観察を中心に、マリアを含むストリートチルドレンへの質問紙調査と、マリアやイサベル家に関わる民間支

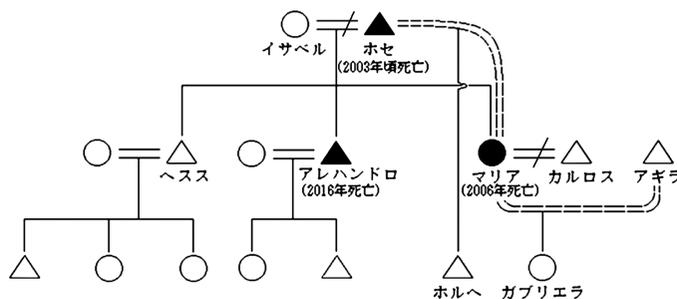


図1 イサベル家の家系図（筆者作成）

△：男性（黒塗りは死亡），○：女性（黒塗りは死亡）
 =：結婚関係（点線は性的関係），／：結婚関係の破綻，|：親子関係

イサベルがメキシコ市で就業したのは、景気が一転し、経済危機回避のためのIMF（国際通貨基金）の勧告を受け入れた1976年前後であった。非識字者の彼女は就業後直ちに解雇され、ベンダーとなった。ウルチュルツ市政（1952-1966年）以降のベンダーへの政策が軟化に転じ、ベンダーが増加した時期にあたる。

イサベルとホセが結婚した1970年代末は、メキシコ市にストリートチルドレンを専門に支援する団体はほとんど存在しなかった⁷⁾。未成年の2人は、問題なく路上で働き、結婚し、間借りできた。

イサベルの子育て時期は、1980年代の経済危機に重なる。第1子は累積債務問題が表面化する前年に、第2・3子は緊縮財政下で市民生活の窮乏した時期に生まれた。大量の失職者がベンダーとなり競合相手となった。1989年には、その急増を受けてベンダーが課税対象なる（Davis 1998, Gordon 1997: 201-206）。ベンダーの商業行為が行政に実質的に認められたのである。

こうした状況下で3人の子どもは物心つく頃には労働市場に参入し、末子のマリアは路上生活へと移行した。マリアが路上生活を送った1990年代は、NAFTA（北米自由貿易協定）発行もあり、輸出に占める工業製品の割合が増えた（経済産業省 2014: 185）。同時に、コロンビアの麻薬カルテルの壊滅を契機にメキシコの麻薬カルテルが勢力を伸ばした。路上では有機溶剤からコカインまであらゆる薬物が入手可能となり、ほぼすべてのストリートチルドレンが薬物依存に陥った。

1990年代にはストリートチルドレンがこれまで以上に大きな社会問題となり、政府による実態調査が2回実施され、支援団体の設立が相次いだ。ストリートチルドレンのおよそ7割を男子が占めたことから、支援対象は主に男子であった。支援が始まると、支援により抑えられた支出分を薬物購入に当てる新たな問題が生じた。支援意図から外れる者への支援打ち切りなどの策が講じられたものの、生存が危ぶまれることから一定期間をあけて支援が再開され、支援の停止と再開とが繰り返された。

1990年代の後半に入ると、何年にもわたり支援を受けてきたストリートチルドレンの多くが成人年齢（18歳）に達し、支援が打ち切られた。主だった支援団体は未成年を支援対象としていたためである。彼らは既に薬物に依存し、支援に頼らずに生活できる十分なスキルを身につけていなかったため、荷物運びなどの単純な仕事を得られなければ、麻薬の売買などに手を染めた。その結果、彼らは刑務所や病院に収容され、あるいは死に至った。この様な状況から1990年後半から2000年前半には、支援団体間の連携や支援の拡充、支援期間の延長などが図られた。政府から支援団体の支援プロジェクトへの資金援助がなされた。2000年には同年発行の「最悪の形態の児童労働の禁止及び撤廃のための即時の行動に関する条約（ILO第182号）」が批准された。

他方、イサベル家の孫世代が生まれた1990年代末から2000年代はじめにかけては、「失われた10年」から脱却し、教育投資が拡充した（米村明夫 2004）。1997年から貧困削減のための条件付き現金給付政策PROGRESA（2002年にOportunidadesに継承）が実施された。ホルヘが通園を始めた2006年には「教育の為の奨学金国家プログラム」として貧困児童への奨学金が拡充され

た。2015年には1976年発行の「就業が認められるための最低年齢に関する条約（ILO第138号）」が批准され、中学生以下の就業が原則禁止された。

以上が、イサベル家を取り巻く社会経済状況の変化である。

3. イサベル家の生活史にみるストリートチルドレン問題

3-1. イサベル家の生活史

イサベルは、現在、50歳過ぎであるが、年齢以上に年老いて見える。もともと小柄な彼女の首は、付根からくの字に曲がりやや猫背気味に不自然にかたまっている。頭は白いもので覆われ、褐色の肌には深くシワが刻まれ、指先は常に煤けている。足元は安物の塩化ビニールのつっかけを、服装は都度つど縫い合わされたエプロンの下に伸びて薄い安物が重ねられている。砂糖入のカミツレ茶を飲んで⁸⁾、病名を知らない足の末端の痛みを耐えている。お世辞にも事足りているとはいえない。

イサベルは、生家での暮らしや家族についてあまり多くを語っていない。寒冷な山間部に生まれ、衣服は十分になかった。ナワ系先住民のあいだで育ち、スペイン語を十分に話せない。学校に通わなかったので読み書きはできない。

12、13歳（1976年）頃、家族に決められて家政婦になるため、一人、マイクロバスのような乗り合いタクシーを乗り継いで、見知らぬ、言葉の通じないメキシコ市にやってきた。その後、ほどなくして仕事を失い、経緯ははっきりとしないものの、メキシコ市旧市街の路上でキャンディをかごにのせ売り歩きをはじめた。イサベルは他のベンダー仲間との互助的な関係を築きながら、かご売りする商品を徐々に増やしていった。

イサベルは15、16歳（1979-1980年）頃に、未成年の行商人のホセと教会にて結婚する。イサベルによると、ホセは、メキシコ市出身の白人系で背が高く——イサベルはこの点を常に強調した——、彼女よりやや年上で、幼少期からベンダーとなり、教育を受けていない。ホセの家族関係はほとんど語られていないが、イサベルが子育て期に頼れなかったことを鑑みると、良好ではなかったようである。

イサベルとホセは、結婚当初、商いをする旧市街まで1-2時間かかるメキシコ市郊外のメキシコ州で間借りをした。2人で働いてお金を貯め、旧市街のはずれにエスキータス（とうもろこしのコンソメ炒め煮）屋の露天を開いた。露天を始めてからも、ホセは、設営や買い出しなどの力仕事を終えると、調理と販売をイサベルに任せて行商に出た。収入を増やし、取り締りや元締めからの金銭・商品の取奪を避けるためであったが、ホセは行商に出ることを口実にその合間に不貞を働いた。

イサベルは17-20歳頃にかけて、1981年頃に第1子ヘススを、1982年頃に第2子アレハンドロ

を、1984年頃に第3子マリアを妊娠・出産する。イサベルが第1子を身籠った時分には、ホセは既に家庭を顧みなくなっていた。しばしば家庭を留守にし、次第に稼ぎを家計に入れなくなっていたが、離婚はしなかった。

ヘススを出産後、イサベルは子育てを夫だけではなく、実家も夫の家族も頼れなかった。また、読み書きができず、情報を手に入れ手続きすることが難しかったことから、保育所も利用しなかった⁹⁾。イサベルは乳飲み子を抱えて、ほぼ毎日、10時間近く働いた。1時間以上かけて市場に向かいとうもろこしや炭などを仕入れ、露天の近くに預けている調理用炉や水、調味料を台車に乗せて運び、設営し、調理・販売した。売り切れれば早々に店をたたむが、売れ残りを夕食にすることも珍しくなかった。重労働に加えて、みかじめ料を取めねばならず、見知らぬ土地での経営は容易ではなかった。経済的に逼迫するなかでの孤軍奮闘により、次第に情緒不安定になり、それは子どもに向かう。ヘススに手をあげはじめたのである。

イサベルの困窮のなかでもホセとの関係は続いており、子どもは増えていき、彼女の育児負担は増大した。第3子マリアが生まれる頃には、家庭内不和はさらに高まり、ホセは殆ど帰らなくなった。マリアが生まれた後しばらくして、20代前半のイサベルは露天の近くに引っ越した。暮らし向きは良くならなかったが、これを機に、イサベルに一時的な恋人が出来るようになった。

子どもたちは、日中は露天のある通りで過ごし、夜はその時々母親の恋人と一間の小さな家で過ごした。家ではイサベルとその恋人から暴力を受けることもあった。兄2人は物心つき始めると徐々に露天を手伝い、次第にバンダーとして働きはじめた。マリアは物心つく前から兄2人に連れられて路上で過ごした。子どもたちは、日がな一日タチンボがたむろし¹⁰⁾、酔っぱらいなどがある通りで過ごすなか、自然とバンダー仲間やその子ども、ストリートチルドレンなどの路上の仲間集団に加わるようになった。

マリアは、バンダーを手伝う他に、家事をしなければならなかった。また、兄以上にイサベルとその恋人から暴力を受けた。その生活が嫌になり、6歳(1990年)頃から自宅近くの通りや公園で長時間過ごすようになった。イサベルはマリアを探そうとせず、帰宅も促さなかった。母親との溝は深まり、マリアは7-8歳と非常に幼くして路上生活を始めた。

マリアは路上で身を守り、食べ物やお金を分けてもらうために、仲間のストリートチルドレンと次々と性的関係を結んだ。次第にシンナーを常用し始め、歩くことも立っていることさえも困難になった。働くことも少なくなり、退廃的な生活を送った。やがてシンナー代にも事欠いて、金欲しさにひそかに自宅に入るようになった。1990年代末、15-16歳頃になったマリアは、自宅に戻った際に偶然居合わせた父親ホセと性的関係に至り、その後はホセとたびたび自宅で待ち合わせるようになった。当時、30代前半であった母親との関係は、著しく険悪になった。

兄2人は、1990年代末にエスキータス屋の隣にそれぞれ、タバコやキャンディなどを売る露天とスナック菓子を売る露天を開いて独立し、結婚して実家の近くに住み始めた。長男ヘススは、

ベンダーの女性と結婚し、子どもを3人設けた。次男アレハンドロも結婚し、子どもを2人設けた。兄2人は行商で稼ぎ、それぞれの妻が各露天を主に切り盛りし、各子どもたちは親の手伝いをしながら就学を継続している。イサベルは店番や釣り銭交換、みかじめ料の負担などを助け合えるようになり、ようやくイサベル家の生活は安定しだしたかに見えた。

一方のマリアは、成人に近づくにつれ路上生活の継続に不安を覚え、17歳（2000年）頃に路上で出会ったカルロスと結婚する。カルロスは、背の高い白人系で、ジャケットを着る身なりの整った、物腰の柔らかな口調の人物である。イサベル家の成員はカルロスについて、その素性も連絡先も知らなかった¹¹⁾。筆者は、マリアの死後、イサベルとの関係が悪化しつつあった時期に1度だけ面識があるが、イサベルからカルロスが会いに来ると言われてから数日間、彼が露天の前を通りかかるのを待たねばならなかった。その際、カルロスは詳細を話さなかったが、複数の仕事を掛け持ちし、アメリカとメキシコの間を往来して「稼いでいる」とのことだった。

マリアはカルロスが頻繁に仕事で家を留守にしたことから、結婚後も路上生活と実父との性的関係を継続させた。カルロスとの結婚生活は実質的に破綻していた。マリアは18歳（2001年）頃、路上生活中に第1子ホルヘを妊娠する。妊娠中もシンナーを手放せず、19歳（2002年）頃に出産する。出産後もシンナーを手放せず、マリアはホルヘを実家に置き去りにし、路上生活に戻った。カルロスは、ホルヘを実子と認めず養育を拒否して、誕生後すぐにアメリカに出稼ぎに行った。ホルヘの養育費や生活費を支払わなかった。

なお、近親者を含む複数の証言から、ホルヘは実父ホセとの子どもであると推測される。この点についてイサベルは、正確に証言していない。しかし、イサベルはホルヘがホセに似ていると言われることを極端に嫌がり、生前と死亡直後にはマリアを「chingada（ファックにあたる否定的な意味合いの口語）」や「pendeja（イサベルが普段用いないバカにあたる若者言葉。相当に強い否定的表現）」などとことのほか口汚く罵った。ホルヘに対する言動も同様にきつかった。その後、マリアを話題にあげない数年を経て、その言動は穏やかになっていった。証言はそれなりに重みがあると考えられる。

ホルヘの養育は、30代後半になったイサベルの手に委ねられたが、問題に満ちたものだった。一時的にホルヘを子ども夫婦に預けることができたが、彼らには商売がある。イサベルは、日常的にホルヘに対して暴力的な態度で接し、0歳から哺乳瓶に炭酸飲料を入れて飲ませたり、暴言を発したり、たびたび育児を放棄した。

一方、マリアは路上生活を継続し、薬物の売人で一帯のストリートチルドレンに対して強い力を持つアギラとの関係を深めていった。この頃、アギラからシンナーをもらい、一日中寝そべてほとんど途切れることなくシンナーを吸引し続け、ろれつが回らなくなっていた。マリアは、カルロスが出稼ぎ中の20歳（2003年）頃に第2子を妊娠する。妊娠後も路上で過ごし、21歳（2004年）頃に、マリアはガブリエラを出産する。同じ頃、実父ホセは死亡する。マリアは、ガ

ブリエラをホルヘ同様にイサベルに預けて路上生活に戻った。なお、カルロスはガブリエラを実子と認めず養育も断った。ガブリエラはアギラとの子どもであると推測される。

筆者がイサベルおよびマリアと関わり始めた2004-2005年頃、イサベルはマリアの子ども2人を育てることになっていた。イサベルは、筆者と子ども夫婦らからの助言により、カルロスに養育と養育費の支払いを要求した。しかし、それらは聞き入れられなかった。

マリアは2005年22歳の頃に路上生活中に襲われ、全治2ヶ月の重症を負う。手術と短期間の入院が認められたが、薬物依存者であることを理由に早期の退院・自宅療養となった。イサベル家には薬を買う余裕はなく、マリアは退院後すぐに路上生活に戻り、シンナーを再び使い始めた。怪我と極度の薬物使用により、マリアは2006年6月に23歳という若さで路上で死亡した。マリアの死後、イサベルは再度カルロスに養育および養育費の支払いを求めたが断られた。

イサベルは遺児2人の養育に向けて、子ども夫婦と筆者の助言から行政とストリートチルドレン支援団体にサポートを求めた。電話番号を含めて一切の読み書きができなかったため手続きには多大な困難を抱えたが、行政の担当者に恵まれて継続的な働きかけがなされた。担当者は、ホルヘの就学が決まるまで週に何回も露天に足を運び、イサベルの気持ちを確かめるとともに必要な手続きを説明し、ときに付き添い、書面を整えた。また、必要のないときにもエスキーツを買いに来ては言葉をかまし、ホルヘが奨学金などの制度を利用でき、イサベルが2人の親権者となれるよう手続きを助けた。

遺児2人は、マリアと面識がほとんどなかった。イサベルを乳幼児期には母親だと思いこんで「ママ」と呼んだ。祖母だと知ってからも「ママ」と呼んでいる。商売道具を運ぶ箱の中に丸まって寝ていた2人は、物心つくくと露天を手伝いはじめる。5-6歳（2007-2008年頃）にはサーカスやクリスマス市がたつと連れ立っておもちゃや仮装グッズなどを販売しはじめた。少しずつ手がかからなくなり、収入が増えて暮らし向きが良くなり、2人に対するイサベルの暴言や暴力は減少し、関係性は目に見えて改善されていった。

ホルヘは行政の担当者の働きかけもあり2006年頃から週払い制の幼稚園へ通い始め、2008年に小学校へ入学した。この頃からホルヘに対するイサベルの態度は著しく改善した。ホルヘは、一定の成績を取め、継続的に奨学金を得ることで家計が安定した。また、ホルヘが読み書きを覚えて就学をはじめ各種手続きにおいてイサベルを補助するようになった。しかし、ホルヘが露天を手伝わなくなり、ベンダーやストリートチルドレンと過ごしてビデオゲーム屋に通いはじめると、イサベルは彼をしばしば叱責した。就学が継続され、ホルヘのゲーム熱が下がり始めると、イサベルは遊びたい盛のホルヘの言葉に次第に耳を傾けるようになった。

ガブリエラへの態度は、ホルヘとは対照的であった。乳幼児期にはイサベルによる不適切な育児や暴言もみられたが、その頻度はホルヘに比べて圧倒的に少なかった。成長に伴い、ガブリエラが店番や売り子をするようになると、イサベルは彼女をよく可愛がった。2010年頃に小学校に

通い始めてからも、路上の仲間と連れ立って遊ぶことはほとんどなく、制服を着たまま店を手伝い、現在に至っている。

2015年には、マリアの兄にあたるアレハンドロが32歳で亡くなった。ストリートチルドレンだった頃に陥った薬物およびアルコールへの依存が原因とのことであった。

2017年8月時点で、ホルへは奨学金を継続受給して進学し、高校1年生となった。父親似の高身長で色白の青年になった。学業に専念し、露天の手伝いも路上の仲間との遊びもめっきり減ったが、時々小遣いをもらいにエスキーテス屋に顔を出している。

ガブリエラも奨学金を得て、中学2年生になった。イサベル譲りで先住民系の目鼻立ちではあるが、体格の良さは母親マリアに似て身長は160cmを超えた。声を張り上げて売り子をするとはなくなったが、客と立ち話しながらエスキーテスをカップに盛り付け、棒付き飴をくわえながら手際よく半分に切ったレモンで唐辛子と塩をエローテス（焼きとうもろこし）にまぶす。思春期に入り、路上販売のネイルや下着などに興味を持つようになったが、自分から「欲しい」と口にするのではない。

3-2. 生活史にみる家族の形態と各成員の子ども期

生活史からは各家族成員が子ども期をそれぞれストリートチルドレンとして過ごしていることが読み取れる。イサベル家は、経済危機下において子育て期に孤立し、子どもを労働に駆り出して、結果的に2人の子どもを死に至らしめた。時間経過とともに経済が好転し、近住拡大家族を形成し、より生活が安定したものの、孫も路上での労働に加わっている。

各成員は子ども期を“home based”, “on the street”, “of the street”のあいだを行き来しながら過ごし、その過ごし方が各成員の成人後の人生にも影響を及ぼしていると考えられる。以下では、各家族成員のおかれた状況と家族の形態の変化に注目しながら、その子ども期をストリートチルドレンの3類型を用いて分類する。

イサベルは、身寄りのないメキシコ市に働きに出て間もなく失職し、12、13歳でベンダーとなった。路上生活について明言していないものの、イサベルは“of the street”にあたる。その後、結婚により家屋と家族を手に入れて、“of the street”から“on the street”へと移行する。しかし、夫の不貞行為により、家族関係は悪化し、夫が収入を家計に入れなくなり、経済的にも社会的にも困窮した。

ホセは、その出生年が不明であるが、メキシコ市出身の未成年ベンダーの“on the street”である。子育て時に家族からの援助がなかったことから“of the street”に近かったと考えられ、度重なる不貞の後、実子と性的関係に至り、40歳前後で死亡する。

彼らの3人の子どもは、経済的にも社会的にも劣悪な養育環境におかれ、家庭内暴力を受けた。3人は生まれながらにして“home based”であった。引っ越しを機に、3人の養育環境はさ

らに悪化した。兄2人は物心付く頃には露天の手伝いをはじめ、就学開始年齢にはベンダー、つまり“on the street”となった。末子のマリアは兄2人に連れられ、より低年齢のうちに労働市場に参入したと推測され、兄2人に比べて“of the street”によりちかかったと考えられる。1980年台の経済危機下で「15歳以上の女性と14歳以下の男子児童の労働市場への新規参入……(中略)……無償家事労働と賃労働という女性の二重労働が、貧困世帯の戦略であった(畑 2005: 360)」ことを鑑みると、イサベル家は著しく逼迫し、子どもを非常に低年齢のうちに労働市場に参入させている。3人とも、“of the street”に限りなく近い“on the street”であったと考えられる。

マリアは、幼少期より通りで売春を目の当たりにし、家事を担い、家庭内で母親の恋人という異性と接触し、さらには母親とその恋人から暴力を受けた。次第に、帰宅頻度を低下させ、路上に放置されるなか仲間との関係性をより強め、薬物に依存するようになった。路上生活へと移行し、“of the street”となり、転落の一途をたどった。

一方、兄2人は家庭生活を維持しながら未成年のベンダーとなり、“on the street”のまま成人した。ベンダーとして独立し、結婚してそれぞれ子どもを養っている。それぞれの子どもたちは、乳幼児期を親の商売に同伴して“home based”として過ごし、成長に伴い、親を手伝うようになり“on the street”となった。しかし、家庭生活、就学ともに継続されている。

マリアの遺児2人は、親から育児放棄され、イサベルによりしばしば不適切な養育がされる“on the street”に近い“home based”であった。幼少期から露天を手伝い、未成年ベンダーとなり、“on the street”となったが、子ども夫婦世帯による相互扶助や公的的制度利用により家庭生活が維持された。長男ホルヘは、一時的に素行不良がみられて“of the street”に転ずるリスクがあったが、2017年時点では路上にいる時間が短くなり、優秀な成績で就学を続ける“home based”に限りなく近い“on the street”である。長女ガブリエラは、幼少期から現在に至るまで日常的にイサベルを手伝う“on the street”である。

イサベルの孫世代は、現状では“on the street”のまま成人し、将来的にはベンダーとして独立するか、就学を継続して正規労働につくと考えられる。ただし、イサベルの次男アレハンドロは、幼少期に始めた薬物使用により30歳を過ぎて死亡に至った。家庭生活を継続したとしても薬物依存に陥ると転落や死亡のリスクが伴う。路上では薬物が蔓延していることから、孫世代も“of the street”となるリスクを負っていると考えられる。

3-3. ストリートチルドレン化予防にむけて

イサベル家の生活史からは、ストリートチルドレンとなる過程やそのおかれた状況は多様である一方で、ベンダーを生業にする都市下層の子どもはその親に同伴し、手伝うなかで非常に低年齢のうちに未成年ベンダーとなっていることが読み取れる。非常に低年齢のうちにベンダーとなる子どもにとって、事故や暴力などから身を守り、成長に必要な手助けを得るためにも、世話を

する大人や年長者の存在は欠かすことができない。

現在、いくつかの民間支援団体は家族支援を既に始めている。その活動による蓄積を活かしながら、多数の既存の民間支援団体が連携し、より低年齢者でベンダーとなる子どもとその家族に対する重点的な支援の実施が求められる。その家族形態やベンダー仲間といった子育て資源を確認しつつ、近住拡大家族の形成を促し、低年齢のベンダーへの世話の担い手を増やす試みが必要であろう。

合わせて、限られた資源のなかでは¹²⁾、ストリートチルドレン化を予防するために現行の奨学金給付と条件付き現金給付政策の継続・拡充が求められる。家族の経済状況を安定化させ、子どもがベンダーとなる年齢を遅らせるとともに、“on the street” から “of the street” へとより深刻な状況に陥るのを防ぐことが重要であろう。

4. むすびにかえて

本稿では、メキシコ市に暮らす都市下層の1つ家族の40年にわたる生活史から、同じ社会経済状況に置かれながらも個々の家族成員が異なる生涯を歩み、あるいは、同じ家族に身を置きながらも時間経過に伴い家族関係が変化したことから、ストリートチルドレン化には家族の形態、ジェンダー、ベンダーとなる年齢、親子関係など様々な要因が複雑に関連していることが示唆された。また、子どもが“home based” から “on the street”, “on the street” から “of the street” へと移行する過程やストリートチルドレンとしての生活状況が成人後の生活状況へと関連することを生活史にて示せた。

一方で、イサベル家については家族構成、成員の出生年など不明点が多い。筆者の力量不足で情報の取得に偏りがでた。筆者と調査対象者との関係は一定ではなく、子どもの成長や成員の死、他者に援助を求める必要などにより変化してきた。また、調査対象者には生活が困難で、家族に路上生活や死亡したストリートチルドレンがいたことにより批難に晒される状況下において、語りえない・語り難い経験を含めてご協力頂いてきた。筆者なりにわかりえたことを記述したが、今後はさらにエビデンスを高めたい。

最後に、長きにわたり調査協力いただいているイサベル家の皆様に、心より感謝申し上げます。

注

- 1) INEGI (メキシコ国立統計地理情報院) 2015年 <http://www.beta.inegi.org.mx/app/areasgeograficas/?ag=09#tabMCCollapse-Indicadores> (2018.5.20参照)
- 2) これまで概念の精緻化が検討されてきたものの (Moulin = Pereira 2000 : 48-49), 統一した見解には至っていない。他にも、路上での生活と労働という行為による区分などがある。

- 3) ストリートチルドレン概念の精緻化に寄与したパウロ・フレイレ (1989) は “home based” を射程に入れていた。また、近年のメキシコ市では “home based” その家族への支援に注力されている。
- 4) ベンダーは、小袋菓子のアメヤガムを 1 個分けにした売り歩きから常設店舗の露店の経営まで幅広い生業である。必要とする資本、知識、技術ひいては参入退出の難易度が異なり、売上や収入も最低賃金未満からその数倍まで多様である。仕事の内容や収入によって、一口にベンダーといっても階層的であり、本稿で事例とするのは下層のベンダーである。
- 5) ファーガスンは近住拡大家族を「コミュニティのソーシャル・キャピタル」と表現している。
- 6) 本調査はストリートチルドレンとその親・家族との双方を対象とする数少ない調査である。ストリートチルドレンに関心をよせる筆者が路上生活するマリアとその近くの路上でエスキテス屋をいとなむ母親イサベルに偶然に出会ったことから始まる。筆者は調査者であると随時伝えているが、関わり始めには親子の間の情報媒介者として、マリアの死後はイサベルの相談相手や売り子の手伝いとして受け入れられている。
- 7) 1918年に設立のFundación Clara Moreno y Miramonは貧困児童支援を中心に行っていた。1979年11月にはチンチャチョマ神父と慕われたガルシア氏が定住型施設用に家を借り、Hogares Providenciaが設立された。しかし、本格的な支援は、1980年代後半の専門支援を行う民間支援団体の設立ラッシュを待たねばならなかった。
- 8) 民間療法の一つ。
- 9) 筆者が当時保育所を利用しなかった理由を尋ねると、肩をすくめ「そんなこと聞かれても」という表情を浮かべた。孫ホルへの幼稚園利用に際して筆者の渡した支援団体の電話番号を書いたメモをみて、イサベルは数字を判読できず、また公衆電話を使えなかったために支援団体に連絡することができなかった。団体の運営する無償・低利用費の幼稚園について説明を重ね、孫のおかれた状況と就学に対するイサベルの意識を団体へ伝え、粘り強く両者のあいだで連絡・橋渡し役を行う必要があった。
- 10) 街娼と一般的に呼ばれ、メキシコ市にはいくつかの有名な街娼通りがある。外国人・高所得者向けから低所得者層向けの通り、男娼通りなどおおよそ売値や性別で区別されているが同じ通りでも年齢や外見などの商業的価値により黄昏時から立ち始めて客を一人だけとる者から長時間立って複数人客をとる者、客がとれない者がいる。本文では生計を立てられず昼夜問わず通りにたつものをあえてタチンボと記した。
- 11) イサベル家の成員は、カルロスについて収入以外に興味・関心を持っていなかったのかもしれない。
- 12) 子どものストリートチルドレン化は個別の要因と社会経済状況とに左右されるため、ストリートチルドレンへの支援は多様な支援が求められる。社会全体としては、ベンダーを

フォーマル経済部門に吸収していく取り組みや売春の規制、薬物の取り締まりなどが欠かせないであろう。特に、成人後までストリートチルドレンの問題を含めるならば、その成人後の生命や生活の質を保証するためにも、薬物問題は優先的に取り組む必要がある。

とはいえ、麻薬戦争と揶揄される今日、薬物の一掃は現実的ではない。ストリートエデュケーションによってストリートチルドレンとその家族が麻薬使用に関するリスクを理解して使用頻度を減らせるよう取り組む必要がある。

参考引用文献一覧

- Comisión Para el estudio de los Niños Callejeros, 1992, *Ciudad de México: Estudio de los Niños Callejeros*, COESNICA.
- Desarrollo Integral de la Familia, 2004, *Programa de Prevención y Atención a Niñas, Niños y Jóvenes en Situación de Calle "De la Calle a la Vida" Marco General de Operación*, DIF.
- , 2006, *"De la calle a la Vida en el Distrito Federal"*, México, México D.F., DIF.
- Diane Davis, 1998, *The Social Construction of Mexico City*, *Journal of Urban History*, 24-3: 383-387.
- Euromonitor, 2006, *Retailing in Mexico*, Euromonitor International.
- Ferguson Kristin, 2004, *Measuring and indigenizing social capital in relation to children's street work in Mexico: The role of culture on shaping social capital indicators*, *Journal of Sociology and Social Welfare*, 31(4): 81-103.
- , 2005, *Child labor and social capital in the mezzosystem: Family-and community-based risk and protective factors for street-working children in Mexico*, *Journal of Social Work Research and Evaluation*, 6(1): 101-120.
- Gary Gordon, 1997, *Pesos and Power: the Political Economy of Street Vending in Mexico city*, The University of Chicago.
- Gaity Dieuveut, 2011, *The forgotten ones: Living conditions and Social functioning of street children in port-au-prince, Haiti*, Haiti; NACSW Convention Proceedings.
- 畑恵子 2005 「メキシコの社会扶助—家族の変容と家族支援政策」宇佐見耕一編『新興工業国の社会福祉——最低生活保障と家族福祉』日本貿易振興機構アジア経済研究所：353-387.
- 原稔 2008 「メキシコの教育変遷—カトリック教理教育からの脱却，信仰の自由への道程」『東洋哲学研究所紀要』24：110-90.
- John Cross, 1998, *Informal Politics Street Vendors and the State in Mexico City*, California; Stanford University Press.
- Jorge Mendoza, Fernando Pozo, David Spener, 2002, *Fragmented Markets, Elaborate Chains: The Retail Distribution of Imported Clothing in Mexico*, *Free Trade and Uneven Development: The North American Apparel Industry After Nafta*, Pennsylvania; Temple University Press.

- Jorge Mendoza, 1994, *The Characteristics and Behavior of Street Vendors: A Case Study in Mexico City*, Ph.D.dissertation, Monterrey; Instituto Tecnológico y de Estudios Superiores de Monterrey.
- 経済産業省 2014 『平成26年版 通商白書——世界経済のダイナミズムを取り込んで実現する生産性向上と経済成長』: 185.
- 小松仁美 2008 『『貧困の文化』の視点からみるストリート・チルドレン問題——現在のメキシコ連邦特別区 (DF) の事例より』『淑徳大学大学院総合福祉研究科研究紀要』 15 : 121-140.
- 2010 「メキシコ合衆国首都DFにおけるストリート・チルドレン——近住拡大家族が果たす役割に注目して」『ラテン・アメリカ論集』 44 : 55-73.
- Luis Otero, 1999, *Los Niños en la Calle y de la Calle: Problemática y Estrategias para Abordarla, México*, Academia Mexicana de Derechos Humanos.
- Manuel Castells, 1977, *The Urban Question: A Marxist Approach*, Edward Arnold. (= 山田操 1984 『都市問題——科学的理論と分析』 恒星社厚生閣)
- 丸谷雄一郎・小松仁美 2008 「メキシコ合衆国におけるストリート・ベンダーに関する一考察——生活条件を向上させていくのが難しい階層のライフヒストリーから」『愛知大学国際問題研究所紀要』 132 : 73-99.
- 増山久美 2001 「メキシコ市東南部の子供たち——『下層』における事例研究」『ラテンアメリカ研究年報』 21 : 61-86.
- 2004 「メキシコ市『大衆地区』における近住拡大家族」『家族社会学研究』 16(1) : 71-82.
- 2005 「メキシコ市低所得層の生存戦術としての『ファミリア』——タンダと核としての女性成員を中心に」『拓殖大学論集』 13 : 58-76.
- 松久玲子 2014 「現代メキシコの若者たちの結婚と恋愛」日本貿易振興機構アジア経済研究所『アジア研ワールド・トレンド』 226 : 40-43.
- Moulin Nelly, Pereira Vilma, 2000, *Chapter 2: Families, Schools, and the Socialization of Brazilian Children: Contemporary Dilemmas that Create Street Children, Children on the Streets of the Americas*, Taylor & Francis Ltd: 43-54.
- Paulo Freire, 1989, *Educadores de rua: Uma abordagem crítica Alternativas de atendimento aos meninos de rua*, UNICEF.
- Susanna Agnelli, 1986, *Street Children: A Growing Urban Tragedy*, Weidenfeld & Nicolson Ltd. (= 日本ユニセフ協会 1988 『ストリートチルドレン——都市化が生んだ小さな犠牲者たち』 草土文化)
- UNICEF, 1996, *II Censo de los niños y niñas en situación de calle: ciudad de México*, UNICEF.
- 米村明夫 2004 「メキシコにおける貧困克服のための社会・教育政策」日本貿易振興機構アジア経済研究所『ラテンアメリカレポート』 21(2) : 22-34.

How the Children of the Urban Underclass in Mexico City Become Street Children: A Reconsideration of Family Life History Over Forty Years

Hitomi KOMATSU

This paper explores in a case study of the urban underclass in Mexico City through a participation observation survey. The childhood of three generations of that family is described through a thick description. This is followed by studies exploring the process by which children become street children.

First, the social economic fluctuation and cultural situation from the 1960's to the present day in Mexico is introduced. This is followed by a classification of the childhood of each family member using although all members of family were at one time street children in the three types of street children.

The results are as follows: Their childhood, their living conditions as street children depended on the economic situation and the family structure at the time. Specifically, in the case of children in the 1980s and 1990s dying in the street arose from the nuclear family's high vulnerability under the economic crisis. Current children working temporarily in the street were produced from the extended families "la familia cercana y la familia vecindad—blood relationships and neighborhood—" and under the improved economy. They are continuing school life and family life now.

Keywords: urban underclass, family life history, vulnerability, street children, mexico